のみがその位置もそのままに残された。建築物としては何度も建替えられているが，江戸時代初期からこの場所にあり，歴史ある劇場と言える。現在の建物（国登録有形文化財）は昭和４年に建てられたもので，平成３年に外観はそのままに内装を全面改修している。

顔見世のまねき看板には，その年の顔見世に出演する歌舞伎役者の名が一枚ずつ筆太の字で丸く大きく黒々と書かれている。歌舞伎独特の勘亭流（かんていりゅう）という書体で，観客を招くための宣伝看板でもある。毎年１１月下旬には南座の正面に，檜の一枚板の看板が２段にわたって掲げられる。

興行がはじまると，南座の前には待ちにまった人々で賑わい，吉例顔見世興行（きちれいかおみせこうぎょう）のために着物を誂（あつら）える人もいる。

南座の建物とまねき看板，そして鑑賞に訪れる人々の姿が，師走のあわただしさを吹き飛ばすような，心浮き立つ京都ならではの華やぎを醸し出し，伝統的な風情を感じさせる。

写真2-86　南座　まねき看板（平成１９年の顔見世より）

(ｴ) 茶の湯

茶の湯は，慈照寺（じしょうじ）の東求堂（とうぐどう）（国宝）内の四畳半の同仁斎において，村田珠光（じゅこう）等が，禅門の儀式である茶礼から分離させた新しい茶礼に始まるとされる。その後，武野紹鴎※１に伝えられ，さらに門下の千利休において大成され，戦国武将の中で広がっていった。

利休没後，千家は利休の子の少庵により復興され，孫の宗旦の三人の子が，「表千家」，「裏千家」，「武者小路千家」を興し，三千家の基礎ができあがった。

江戸時代の元禄期になると，茶の湯は町人社会に広がり，三千家や藪内家の他，現在も伝統を守り続けている久田家，堀内家，速水家の茶家により多くの町人に普及した。

近代に入り，一般教養として茶の湯が取り入れられるようになり，人々の日々の暮らしの中で，親しまれるようになった。

現在，千利休や茶の湯と関係の深い大徳寺では，毎月利休の命日である２７日に，塔頭「聚光院」において三千家が交代で，重要文化財の方丈や茶室の閑隠席（かんいんせき）などで法要や茶会が，またその他の塔頭でも茶会が行なわれる。

他にも，京都の神社仏閣では各家元の献茶奉仕が行われるほか，これらの寺社に付属する茶室等では「月釜」と呼ばれる会員制の茶会が普及し，御香宮神社，北野天満宮，梨木神社，大徳寺，など現在２０箇所以上の寺社で月釜が行なわれている。新年の頃になると，和装姿で「初釜」に向かう人々が往来し，町並みに彩を添えている。また，御香宮神社や梨木神社は，名水があることで知られており，人々がお茶を点てる水などを汲みに訪れる姿が見られる。

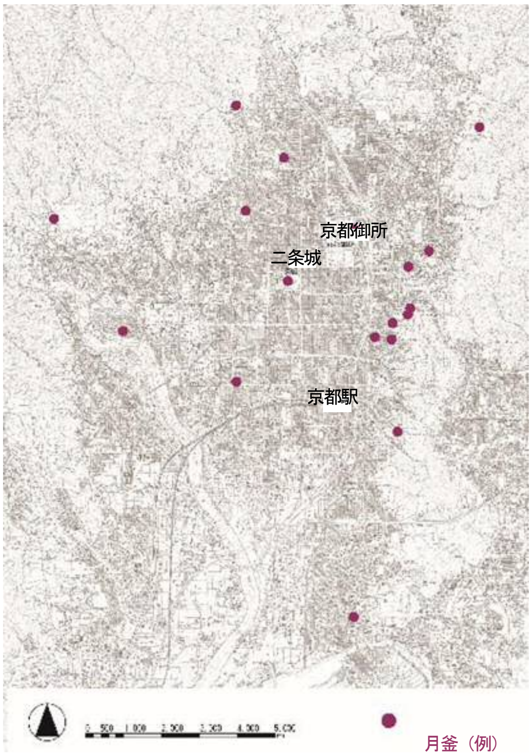

図2-55　京都の月釜（例）